



## 養護学校の日々 記憶された時間

津守 真

一月中旬のある日、子どもたちが帰るころの時間に、昨年幼稚部を卒業して特殊学級にいったM子が、母親と父親と妹と一緒に訪ねてきた。室内で他の子と遊んでいた私の前に突然あらわれたM子が、以前よりも背丈が伸びたように思えて、一瞬、私は戸迷った。M子も私を見て、すぐには親しさを示さなかった。じきに母親が、「つもりせんせい。おぼえているでしょう」とM子に声をかけたが、M子は私を覚えているかどうか分らないほど、

何の反応も示さなかった。父親が私に笑いかけて挨拶した。

M子は、最初は立ち止ったまま、しばらく動かなかつたが、やがて足もとにあった毛糸の紐のついた汽車を引張った。それが障害物につかえたとき、私は手を貸して動くようにした。こんなことからはいじまって、M子の中に動き出した能動性を助けるように、私もM子と一緒に動き、滑り台と一緒にすべると、笑顔を見せた。M子にとって、この場所と人が、現在、意味をもちはじめたように見えた。

M子は箱車を見て、「赤ちゃんがこれにのるの」と云う。私は、M子が幼稚園のころ、妹はまだ赤ちゃんの時期を脱げ出たばかりだったことを思い出した。母親は、写真をもつてきて、M子の学校での様子などを話してくれた。M子だけが体育服を着かえなかったり、入学当初は本人も気を使うのか疲れた様子があったが、このごろは無事に過していると話してくれた。

庭の片隅に、最近設置した赤い色のシーソーがあり、

M子はそのシーソーに乗って遊びはじめたので、私は他の端に坐って、二人で何度も上ったり下ったりした。日がかげって寒くなってきたが、M子は私と一緒にいることを楽しんでる様子なので、私も頑張ってシーソーをつづけた。

そのとき、突然、工事場で、ブ——ンという金属音がした。M子はケラケラ笑う。私も、何だかM子と笑うのがうれしくて、心から笑った。何度も何度も一緒に笑った。また、ブ——ンと音がしたとき、M子は、「ブ——ンだって、おなら」と云ってまた笑う。もう笑うことしかない世界みたいだった。寒さも、シーソーに乗っている現実の感覚もこえて、ただこの子と笑いあう世界だけがあった。

底が抜けた笑いの世界には、未来の心配もなく、過去の痛みもない。現実のあらゆる枠がとり払われたところに、もうひとつの別の世界がある。広く深い世界が一面にひろがったような感覚に浸って、その時が過ぎ去るのが残念に思えてくる。現在に存在すること自体に価値の

ある、共有された子どもの世界である。こうして笑っている最中に、M子は突然「ここきたことある」と云う。私と一緒に、ただひたすらに笑い合ったとき、これは以前に体験したのと同じ世界だと再認した。

二年半前に、私はM子と一緒に、周囲を忘れてひたすらに遊んだ類似の体験が何度もあった。その最初は夏のことだったが、砂場で他の子どもに砂をかけられ、M子は私の後にかくれてキャーキャー声を立てて逃げまわりながら、一緒に面白く三十分くらいを共に過ごした。一週間後にまた砂場でM子に出会ったとき、私はおだんごですと云って砂を差し出した。M子は「うんこのおだんごです。おしっこです」と云う。M子は家を引越してから、便所がこわくなり、排泄のことで親子ともに悩んでいた。そのうちにM子は皿に砂を盛って私に差し出した。私が受けとろうとすると、その砂を私にかけて笑った。私が皿を差し出すと、すぐにその皿の砂を私にかけてケラケラ笑う。私もやり返したりやられたり、それをくり

返して一緒に笑い合った。それから追いかけっこをして、いるうちに昼食になった。

更に一週間の後、庭に出るとM子が私を見て笑う。庭に出した机の上に、筆と絵の具が置いてあった。M子は筆をとって、私の腕に絵の具を塗った。それから手で絵の具を腕一面に塗った。私は紙にえのぐでかきはじめたが、M子はそれには見向きもしない。私の顔にもえのぐを塗ろうとしたが、私は立っていたのでとどかず、シャツに赤や白や青で色をつけた。いい加減のところでは手を洗いにさそった。M子は自分で限度を保ってやってしたが、非常にたのしいという様子ではなかった。帰りにかけに母親が云うのには、きょうはつもりせんと遊ぶといつて家を出てきたとのことであった。私は、もっと思い切つて遊ばなかったことを後悔した。いまの私だつたならば、こんな中途半端なつき合い方をしなかっただろう。また、信頼関係ができたときに、その人がこれであるとたしかめるのにその顔に絵の具を塗る、というのを、もっと早くに察知しただろう。何よりも、

その場を十分にたのしむるように、もっと力をかしただらう。こんな不満足感を私自身に残したまま夏休みにはいり、その後しばらくの間、M子と接する機会がなかった。

十一月になって、ある日、M子は私の手をひいて、裏庭の砂場にいった。容器にぬれた砂がついているのを見て、「きたない」と云う。私は「白砂で洗うときれいになるよ」というと、M子は容器にかわいた砂をいれて、私の頭の上から砂をざあざあとかけた。「からだも、目も洗いましょう。口を洗いましょう」と云って、M子は私からだ中に砂をかけた。丁度このころ、私は障害児の保育の場と、普通の子どもの保育の場と、いずれかを選択すべく決断をせまられていたが、まだ決しかねて、心が揺れ動いていた。私は何かこの子どもたちに対して犯罪めいた思いがあり、M子が私の頭から砂をかけてとき、されるに任せてそれを受けようと思った。これはきわめて特殊な条件における私の側の心理作用であるが、そのことがM子の活動に私が全面的に協力すること

を可能にしたのだと思う。砂をかけたりにかけられたりしながら、M子と一緒に心から笑い合った。

その後、M子と私は、いろいろな場面で遊ぶことになった。人形をおしっこにつれてゆく遊び。お化けごっこなど、排泄の問題や、恐怖の問題をかかえていたこの子どもとの間で、私も考えさせられることが多くあった。そしてこのような遊びと共に、一緒に笑い合うことによって遊びが終結することがしばしばあった。そして、丁度二年前の一月には、いつものように人形をおしっこにつれてゆく遊びをして後、戸外の滑り台の上のペランダで、M子と私は横になって、青空をながめながら、注射ごっこをして一緒に笑いあい、前後を忘れて、その時間をたのしんだ。実際には短時間であるが、それは深く存在の根底に達するような、二人に共有され、他のすべてを忘れさせる時間であった。その時は、次の現実に移りゆき、過ぎ去っても、私はその体験を忘れることができないでいた。

それが私だけの体験ではなく、M子にも共通に体験さ

れていたことが、二年後に再会したこのときに確認された。M子が「ここきたことある」と云ったとき、このシーソーは二年前にはなかった新しい道具だから、知覚された物が記憶の媒介となっているのではなく、同種の体験が記憶となって甦ったのであることは明かである。このことは、大人の時間とは異質な子どもの時間があることを考えさせてくれる。

子どもの生きる時間は、大人が予定に従って活動を進めてゆくときの、順序を追って一様に流れる直線の時間とは別の次元にある。それは過去や未来の束縛から解放たれて、人が自分らしく生きることのできる根源的時間である。直線の時間と対比するならば、瞬間の一点を深く掘り下げたところにあらわれる、無時間的時間ともいえる。その中で人は真に能動的になり創造的になる。

普段、直線の時間の枠に縛られて生活している大人は、子どもをもその中にはめこもうとする。子どもはそれにある程度従うのだが、子どもの生活の本領は、直線的时间ではなく、根源的時間の中にある。大人は、最初

は努力を要するのだが、子どもの生活に参与することによって、子どもの時間を共有して体験することができ。ここに記したように、この過程は徐々に進行し、突然、双方が互いに相手に対して開かれる。そのとき、子どもは自分の世界を生きはじめ、大人も、自分自身の底に、子どもの世界があったことに気付く。

子どもの生きる根源的時間は、子どものいるところ、どこにもある。私共が心を開いて子どもの時間にふれて生きはじめるとき、保育者と云いうるのではないかと思

(愛育養護学校)